附属学校との連携を通した演奏会の開催における意義と課題について

加納　暁子

Ⅰ　はじめに

本論は、附属学校との連携による合同の演奏会『きらきらコンサート』(2005年7月2日開催)『わくわくコンサート』(2006年2月26日開催)の実践報告を通して、演奏会の意義及び課題について主に大学生の意見から検討を行うことを目的とする。

本演奏会は、附属学校との連携を図り、大学と地域との交流を深めることを目的として、4年前より附属学校と教育学部芸術表現講座が協力して開催してきた。大学では『総合演習』の授業の一環として、学校教育教員養成課程の音楽選修、美術選修の2、3年生が中心となって、演奏会を企画、実行する。そして、大学生が附属学校の児童、生徒と関わりながら、演奏会を自主的に運営することによって、将来、学校の教育現場に立ったとき、総合的な学習の時間、或いは音楽会や文化祭といった各種行事の中で、リーダーシップを発揮することのできる教員になることをねらいとしている。

演奏会の運営にあたっては、①準備活動、②本番の活動、③反省会の三つの段階が必要となる。本論では、準備活動、及び本番の活動における大学生の活動状況を概観した後、反省会で得られた意見をもとに、演奏会の意義と課題について明らかにしていく。

Ⅱ　演奏会の概要

ここでは、演奏会の実施状況、及び構成について概観する。

表1　附属学校との連携による演奏会の実施概要

名称	『きらきらコンサート』	『わくわくコンサート』
日時	2005年7月2日(土)13時30分～15時30分	2006年2月26日(日)13時30分～15時30分
場所	長崎大学　中部講堂	長崎大学　中部講堂
出演	長崎大学教育学部附属小学校「金管バンド」「合唱団」 長崎大学教育学部附属中学校「コーラス部」 長崎大学教育学部附属養護学校「どれみコーラス」 長崎大学教育学部の学生と教員	長崎大学教育学部附属小学校「金管バンド」「合唱団」 長崎大学教育学部附属中学校「コーラス部」 長崎大学教育学部附属養護学校「どれみコーラス」 長崎市立桜町小学校「コーラス部」 長崎大学教育学部の学生と教員

各学校の児童、生徒による演奏、大学の学生や教員による演奏の後、出演者と会場に来てくださった方がともに、全体合唱を行う機会が設けられている。プロ

グラムの詳細は以下のとおりである。

表２　『きらきらコンサート』及び『わくわくコンサート』のプログラムの内容

『きらきらコンサート』	『わくわくコンサート』
第一部 ○『マリンバ演奏』(大学生)《ジブリメドレー》 ○『附属養護学校どれみコーラス』 《ドレミの歌》《サウンド・オブ・ミュージック》《カントリーロード》《私のお気に入り》《世界のまんなかで》 ○『附属小学校コーラス』 《With You Smile》《ホタルこい》《みんな　みんな》 －休憩－ 第二部 ○『附属小学校金管バンド』 《シング》《ルパンⅢ世のテーマ》 ○『附属中学校コーラス』 《となりのトトロ「さんぽ」》《ジッパ・ディー・ドゥー・ダー》《ホール・ニュー・ワールド》《おおシャンゼリゼ》 ○『ピアノ連弾』(大学生) 《スラブ舞曲》《虹の彼方に》 ○『ヴァイオリン演奏』(教員)《情熱大陸》 ○『全体合唱』 《ビリーブ》《翼をください》《世界に一つだけの花》	１．オープニング：音楽科２年ゴスペル《ホールニューワールド》 ２．附属養護学校どれみコーラス 《ドレミの歌》《エーデルワイス》(トーンチャイム付)《カントリーロード》《スマイル》《すべての山に登れ》 ３．桜町小学校コーラス部 《With You Smile》《U&I》《広い世界へ》 －休憩－ ４．附属小学校金管バンド 《POP STAR》《涙そうそう》《PECORI♥NIGHT》 ５．附属小学校合唱団 《野に咲く花のように》《見上げてごらん夜の星を》《いい湯、湯の国》 ６．音楽科美術科３年ハンドベル 《小さな世界》《虹のかなたに》 ７．附属中学校コーラス 《君をのせて～天空の城ラピュタより》《美女と野獣》《オブ・ラ・ディ．オブ・ラ・ダ》 ８．全体合唱 《手のひらを太陽に》《涙そうそう》《世界のまんなかで》

Ⅲ　演奏会の活動内容

１．準備活動

演奏会を開催する際の準備活動として、以下の５つの活動があげられる。

①プログラムの作成

②出演団体との連絡調整

③広報活動（後援依頼）

④チラシ・ポスターなどの作成

⑤演奏の準備

①プログラムの作成、及び④チラシ・ポスターの作成は美術選修の学生が担当した。また、当日の看板作り及び大学生が着用した揃いのＴシャツの作成も、美

術選修の学生が担当した。②出演団体との連絡調整は、附属学校の演奏曲目を確認したり当日のスケジュールを伝える仕事であり、音楽選修の３年生が担当した。③広報活動は、主に教育委員会や報道関係各社に対する後援依頼であり、初等教育の２年生が担当した。⑤演奏の準備は更に３つの活動に分けられ、全体合唱の準備、学生の演奏の準備、どれみコーラスの支援があげられる。全体合唱、学生の演奏の選曲、演奏依頼などは中学校教育コースの音楽選修の２年生が担当した。

また、どれみコーラスの支援は、本演奏会の準備活動の中でも、特に重要な位置を占めている。５月、６月、２月の土曜日の午前中に、附属養護学校の生徒たちが音楽棟２番教室で、合唱の練習を行うもので、その練習に大学生が加わることによって、養護学校の生徒たちや障害を持った方々との交流を深める機会をもつことを目的としている。練習の初期は大学生に若干戸惑いも見られたが、養護学校の生徒たちの人懐こさに助けられ、彼らが一生懸命に練習をする姿を目の当たりにすることによって、大学生もすぐ練習活動に溶け込み、一緒に歌ったり、踊ったりすることができた。また、練習の過程において、歌詞カードや歌詞に即した絵カードを作る必要性がでてきたが、美術選修の学生が適宜、模造紙や画用紙に種々のカードを作り、合唱の中でそれらを提示することによって、養護学校の生徒たちもイメージを持ちながら歌うことができた。

2. 本番の活動

本番の活動として、以下の活動があげられる。

①舞台・会場の準備と片付け
②受付・誘導・接待・会場整理
③進行
④機器操作・録音、録画などの記録
⑤楽器・機材の運搬
⑥演奏

①舞台・会場の準備と片付けでは、舞台に反響板を設置する作業や当日のリハーサルの管理などが含まれる。また、休憩時に附属小学校の金管バンドの設営を行った。②受付では、演奏会とは別に季節の行事として『きらきらコンサート』のみ七夕の短冊を小中学生に書いてもらう活動を行い、好評を得た。③進行は、附属学校の児童、生徒と大学生が交代で司会を受け持ち、協力し合って行われた。その他④機器操作・録音、録画などの記録、⑤楽器・機材の運搬の活動においては、すべて大学生、附属学校の児童・生徒、教員が協力し合って行い、演奏会はスケジュール通りに進行した。

⑥演奏に関して、附属養護学校どれみコーラスの演奏のうち、《ドレミの歌》はサウンド・オブ・ミュージックの原曲では「ドはドーナツのド、レはレモンのレ・・」

と続くが、今回演奏された歌詞は、「ドはドラエモンのド、レはレストランのレ、ミはミルクのミ、ファはファミリーのファ、ソは虹の空、ラはライオンのラ、シはシンデレラ」と養護学校の生徒たちが考えたオリジナルのものであった。そして、それぞれのキャラクターに合わせて、身振りを加えたり、声の調子を変えながら、生き生きと歌唱していた。また、《世界のまんなかで》は手話を交えながら歌うもので、生徒たちは大学生とともに手話を覚えながら歌唱していた。全体合唱はプログラムに歌詞を掲載し、会場のお客様と出演者がともに合唱を行うもので、演奏会のフィナーレとして会場全体が一体となった。いずれのプログラムも音楽科の大学生がバンドを結成し、オーケストラのような響きをバックに合唱することができた。

3. 反省会

演奏会終了後、『きらきらコンサート』は、7月12日の1限目に反省会が行われた。まず、各自で「①自分が行った仕事についての反省」「②演奏会でなにを学んだのか」「③良かった点、改善した方がよい点」についてA4用紙一枚程度にまとめ、それを持ち寄りグループでまとめて発表することによって、反省点を共有する形式をとった。『わくわくコンサート』は演奏会終了後、A4用紙一枚に感想をまとめ提出する形式をとった。反省点を総括し、「良かった点」「改善点」「感想」「課題」の四項目に分類すると以下のようになる。

表3　『きらきらコンサート』『わくわくコンサート』に対する大学生の感想

	『きらきらコンサート』(感想文提出者29名)	『わくわくコンサート』(感想文提出者21名)
良かった点	・養護学校の生徒への対応の仕方が分かった。(7名) ・どれみコーラスの練習に参加することによって、子どもたちと仲良くなり、それが演奏会への成功につながる。(5名) ・子どもたちが楽しそうに歌っていて喜んでもらえた。(4名) ・学年、選修を越えた交流ができた。(4名) ・人とのふれあいができた。(3名) ・音楽の素晴らしさ、一体感、さらに楽しさの共有ができた。(2名)	・前回の経験と反省から仕事内容が把握されており、スムーズに準備が進められた。(5名) ・定期的に話し合ったので、自分の仕事だけでなく他の人の仕事内容が見えてきて手伝うことができた。(3名) ・養護学校の子ども一人一人の特徴が分かってきて、関わり方が分かるようになった。(2名) ・合唱の練習を通して一緒に取り組もうという意識が高まりそれが準備や当日の活動にもつながった。(1名) ・手拍子などで会場に一体感が生まれた。(1名) ・宣伝が前よりできてお客様が多かった。(1名)

改善点	・どれみコーラスの練習での、大学生の出席率の悪さ。(12名) ・後援取りが遅くなった。(6名) ・選曲が遅れることによって、プログラム作成も遅くなった。(4名)	・合唱の練習時間が少なかった。(5名) ・定例会やどれみコーラスの参加メンバーが固定化されていた。(3名) ・地域の人(外部)への宣伝活動が不十分(2名) ・同じ係でも仕事をいくつもする人と何もしない人に分かれた。(2名)
感想	・会を企画、運営するには多くの過程があることを知った。自分の仕事を確実にこなすこと、当日の連帯感、意識統一が必要である。(15名) ・自らが積極的に動くことが必要である。(4名)	・音楽のもつ楽しさや素晴らしさを味わうことができた。(3名) ・催し物をするためにすべきことが沢山あること、どのように分担していくかを知ることができた。(1名)
課題	・準備段階でみんなが集まることが少なく、学生間での連絡、報告会が必要である。(17名) ・次回は大学生全員が参加できる出し物(演奏、ダンス、仮装)をやりたい。(5名) ・ビラ配りなど宣伝活動をもっと行うべきである。(4名)	・MLを使って密に連絡をとるべき。(2名) ・当日のタイムスケジュールを一人しか持っていなかったので、コピーして全員が演奏会の流れを把握すべき。(1名)

表から分かることは以下のとおりである。まず、「良かった点」について『きらきらコンサート』では養護学校の生徒や多くの人たちとのふれあいができて良かったという感想が多い。この傾向は『わくわくコンサート』でも見られるが、『わくわくコンサート』は人とのふれあいに加えて、運営、企画の面で「前回の経験と反省を生かし、準備がスムーズにいった」「自分の仕事だけでなく、他の人の仕事を手伝うことができた」という意見が多く見られる。

「改善点」について『きらきらコンサート』ではどれみコーラスへの出席率の悪さがあげられており、『わくわくコンサート』ではその人数は減っているものの、仕事を積極的に行う人とそうではない人との格差や不公平感がまだ残った形となった。より出欠確認を細かく行うことも必要であると考える。

「感想」について「演奏会を主催するためには多くの過程があることを知った」という意見は『きらきらコンサート』の際は15名であったのが、『わくわくコンサート』では1名に減っている。これは概ね学生たちが『きらきらコンサート』で得た経験や反省を『わくわくコンサート』に生かすことができたと考えているものと考察する。また「音楽のもつ楽しさや素晴らしさを味わう」という意見は『きらきらコンサート』では「良かった点」に分類したが、『わくわくコンサート』ではさらに「言葉は通じなくても音楽を通して自然と体が動いたり笑顔になれることが嬉しかった」「音楽を通じて様々な人たちと接する機会をもち、皆で一緒に

なって取り組む楽しさを感じることができた」と感想について詳しく述べており、深く掘り下げて音楽のもつ力について感じ取っているといえる。

「課題」について『きらきらコンサート』では「学生間の報告会が必要である」という意見が出された。この課題を生かして『わくわくコンサート』開催前に、約５回ほど大学生による報告会が行われ、進捗状況や予定などを確認した。このことから『わくわくコンサート』では「良かった点」として報告会によって「他の人の仕事も把握でき手伝えた」という意見があり、報告会の成果は見られたといえる。しかし一方で、報告会があっても「今日は各自で話し合い」という日もあったため、「ML によるさらに密な連絡が必要である」という意見も見られた。また「大学生全員が参加できる出し物」についても『わくわくコンサート』では２年生がゴスペル、３年生がハンドベルによる演奏を行い、『きらきらコンサート』での課題は実現された。異なる選修の学生が一緒に練習を行うことによって連帯感や協調性が生まれた一方で、やはり練習参加率の格差という課題も残った。「ビラ配り」に関する課題も『わくわくコンサート』では積極的に行ったため、「お客様が増えた」という意見が見られるが、一方でさらに「地域の人たちへの発信も必要である」という課題が新たに生まれてきた。また演奏会当日、すべての人が演奏会の流れを把握するために「タイムスケジュールを作るべきである」という意見が新たに出され、これらは今後の演奏会の開催と成功に向けて重要な課題であるといえる。

Ⅳ 考察

本論では、附属学校との連携を通した演奏会の意義と課題について明らかにすることを目的としていた。先の反省会の資料から、演奏会の意義として３つの側面からまとめることができる。

【演奏会の意義】

１．運営・企画

まず大学生が演奏会を通して学んだことの一つに、運営、企画の側面があげられる。演奏会を運営・企画する際の仕事はプログラムの計画、広報、各団体との連絡調整、演奏の練習と実に多岐にわたり、その中で果たすべき役割を認識し、自らが積極的に動くことを学んだ。大学生はこれまでの学校生活で、自らリーダーシップをとって、何か企画を運営する経験が少なく、常に、学校の先生が準備した企画に参加していた形が多かったのではないだろうかと思われる。しかし、企画・準備の段階から行うことによって、一つの演奏会を開催するために、多くの過程、仕事があることを知り、この活動を通して、積極的に自分から行動すること、演奏会全体の流れを把握しながら他の人の仕事も手伝い、協力して演奏会を成功させていく必要性を実感している学生が多く見られた。

2. 他者との交流

二点目の意義として、養護学校の生徒をはじめ、学年、選修を超えた人とのふれあいを学ぶ、他者との交流という側面があげられる。特に、大学生にとって養護学校の生徒たちとの交流を持つ経験は少なく、初めは戸惑う学生も多かった。しかし、共に歌ったり踊ったりすることによって、硬さが少なくなり、大学生は自分たちとなんら変わらない、一人の人格や個性を持った人間として、自然に接することを学んだようである。

3. 音楽活動を通した一体感

上記の大学生と養護学校の生徒たちとの交流を深いものとした媒介は音楽であり、音楽を通した一体感や楽しさの共有、音楽の素晴らしさというものを大学生は改めて実感したようである。また、大学生全員が参加できる出し物を考えたり、小、中学生や会場に来てくださったお客様と共に音楽活動を行うことによって、合同演奏会ならではの一体感が生まれるものといえる。

【演奏会の課題】

1. 運営・企画

課題としては学生間での連絡、報告会やメーリングリストの活用によって、運営・企画の側面においてより円滑に諸活動が連携を保ちながら行われることの必要性があげられた。これは例えば、附属学校との連絡が遅れると、選曲が遅れ、その影響を受けてプログラム作りが遅れるばかりでなく、附属学校の児童、生徒、先生、保護者の方すべてに迷惑をかける結果となる。このことから、大学生はさらに当日のタイムスケジュールを作成し、各自、各団体が演奏会全体の流れを把握し連携を取りながら演奏会を成功させていく必要性を学んだ。

2. 練習への取り組み

また、どれみコーラスの出席率を上げることも今後の課題といえる。今回は毎回出席する学生とほとんど出席しない学生が二極化したため、双方で不公平感が残ったようである。しかし毎回出席した学生からは、養護学校の生徒たちとのふれあいの素晴らしさや、ふれあいがコンサートの成功へつながるといった、演奏会の意義と関連した前向きな意見が出されている。次回から、すべての学生が積極的にどれみコーラスや大学生で行う演奏の練習に参加するようになると、より演奏会当日の一体感、充実感が高まるのではないだろうかと考える。

以上、附属学校との連携を通した演奏会では課題は尽きないが、演奏会の意義である1．運営・企画、2．他者との交流、3．音楽活動を通した一体感を学習、経験することは、普段の大学の講義では得られない経験を学生たちは学ぶことができる。そして、この経験は教員として小、中、高等学校の教育現場にたち、演

奏会や催し物を運営、企画する際の貴重な、かつ生きた学習につながるといえる。

なお、本論の今後の課題として、今回は大学生の感想文から演奏会の意義や課題について考察したが、次回以降、附属学校の児童・生徒から感想文やアンケートを得られると、より附属学校との連携を意識した演奏会の企画への発展や、意義・課題が見えてくるものと思われる。